

# 『嵐が丘』 - ゴシック小説の中の ロマン主義的な要素

Wuthering Heights : Element of Romanticism in the Gothic Novel

阿部 陽子

Yoko Abe

## 1 ゴシック小説としての『嵐が丘』

『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847)は二つの館をめぐる話であり、典型的なゴシック(Gothic)小説である。ゴシック小説とは起源は建築のゴシック式建築からきていて、荘厳な教会の建物から派生して、一つの建物、あるいは一つの空間の中で起こる話である。気味の悪い、幻想的な、超自然的な話で、幽霊が出る城や、遺跡、原始的な風景の中で起こる。ゴシック小説には悪者(villan)がいて、その人は建物の主人で自分以外の人を苦しめ、時には暴力をふるう。ゴシック小説の家の長、つまり悪者は一つの建物を自分の意のままにし、そこに住む人々も自分に従わせる。元々ゴシック建築が中世の教会のことで、ゴシック建築の教会の時代の中世は人々が病気や飢饉などの恐れの中で信仰を持っていたので、ゴシックは恐怖で人を中心に向かわせるあり方である。ゴシック小説の支配者である悪者も城や屋敷の中の者を恐怖に陥れて操る。

『嵐が丘』の場合、支配者はアーンショウ(Earnshaw)家の農家の跡継ぎであるヒンドリー(Hindley)と、富を得て後にアーンショウ家に戻って来たヒースクリフ(Heathcliff)である。アーンショウ家は使用人をかかえた農家で、子供が二人いた。ある日、主人は捨て子のヒースクリフを連れて帰って来る。主人はヒースクリフを可愛がるが、主人の死後、アーンショウ家の主となった息子ヒンドリーによってヒースクリフは使用人にさせられ、虐げられる。ヒースクリフはヒンドリーの妹であるキャサリン(Catherine)と仲が良かったが、キャサリンが結婚することを聞いたヒースクリフは姿を消し、3年後、ヒースクリフは富を得て紳士としてアーンショウ家に戻って来る。そして今度はヒンドリーを虐げ、ヒンドリーが死ぬと自分がアーンショウ家の建物「嵐が丘」を所有する。一方で、キャサリンの結婚相手である貴族の妹とヒースクリフは結婚し、キャサリンとその夫が死ぬと、ヒースクリフは貴族の家をも支配する。ヒンドリーに虐められていたヒースクリフはアーンショウ家の人間をヒンドリー、キャサリンの順に苦しめてゆく。ヒンドリーとは館をめぐる争い、そしてキャサリンにはかつ

ての恋人として、既婚のキャサリンに交際を迫り、キャサリンを自滅させる。一方で、キャサリンの夫の妹イザベラ(Isabella)と結婚したヒースクリフはイザベラを虐待する。このように筋を捉えて行くと、ヒースクリフとは次々と殺人を犯した怪物フランケンシュタイン(Frankenstein)のようである。確かに、『嵐が丘』をこのような暴君の話として読むことはできる。

ゴシックとは、ゴシック建築に由来し、教会や修道院など、一つの建物の中で起こる話である。屋敷や家庭で起こる話でもある。屋敷は家庭でもあるので、多くの場合、封建的な話、組織の中で起こる話である。多くの場合、屋敷の中に長がいて、その長は悪者である。『嵐が丘』は屋敷をめぐる話なので、ゴシック小説でもある。屋敷の主はキャサリンの父、キャサリンの兄であるヒンドリー、ヒースクリフと移り変わり、ヒンドリーとヒースクリフは周りの人を酷い目に遭わせる悪者である。しかし、身分の違う恋へのヒースクリフの執念はロマン主義小説の要素である。また、小説の中にはヒースクリフが自らを慕うイザベラと駆け落ちする場面がある。駆け落ちというのは、封建的な制度の中にしか発生しないがゆえに、ゴシック小説ならではの場面と言えるであろう。ゴシックと対極なのはロマン主義 (Romanticism) である。

## 2 『嵐が丘』とロマン主義の要素

『嵐が丘』を印象づけるのは、年月を超えた永遠の愛である。主人公キャサリンとヒースクリフとの適わぬ恋愛は2世の代で成就される。『嵐が丘』は映画によってそのイメージが知られている。ロレンス・オリビエ (Laurence Olivier) 主演の「嵐が丘」(1939) は、キャサリンとヒースクリフトの階級が違うがゆえの許されない結婚と、キャサリンが亡くなって絶望するヒースクリフという1代目のことだけが描かれている。それに対してジュリエット・ビノシュ (Juliette Binoche) が演じるキャサリンの「嵐が丘」(1992) は1代目では適わなかった結婚を、それぞれの2代目の子供同士を結婚させることによって成就させる話となっている。ケイト・ブッシュ (Kate Bush) の歌「嵐が丘」(1978) は、小説の冒頭でキャサリンの幽霊がヒースクリフを見つけようとしながらさまよっている姿が描かれており、「嵐が丘」という作品独特の生と死の境目の無さを表している。 いったい、ロマン主義 (romanticism) とは何であろうか。「ロマン」や「ロマンス」、「ロマンティック」という言葉と関連がある。ロマン主義とは、強い感情があり、感情を中心に描く作品のジャンルである。絵画にも音楽にも文芸にも共通した流れであり、自らの意思での恋であり、あるいは信念に根ざして革命に加担したりする。個人が自らの想いのままに行動するが、それ故に個人では抱えきれない重みを背負い、文芸の場合は、多くの場合、感情に押しつぶされて悲劇に終わりもする。平たく定義すると、ロマン主義とは恋愛や革命ということになる。

イギリス文学に関して、ジェーン・オースティンの作品を好むタイプの人とウォルター・スコット

の作品を好む人に分かれる。前者は期待される役割を主人公が周りから読み取り、それに応えてゆく。人間関係の機微が描かれている。後者は、歴史上の人物などが故郷のために戦ったり姫を救ったりする話で、人物達は感情の意のままに行動する。感情の意のままにというのがロマン主義の特徴である。主人公達は現実ではなく感情や憧れに身をやつすあまりに破滅し得る。『嵐が丘』はこのロマン主義的な小説で、ヒースクリフを始めとする主人公達は激しい感情のために周りの人や自身を不幸にする。精神世界を重視するロマン主義らしく、『嵐が丘』には自然の中に佇むキャサリンやヒースクリフが描かれている。自然の中では階級の枠組みもなく、思うがままでいられるのである。そのことはロマン主義の小説の一つの特徴である。

### 3 ロマン主義と閉じ込める人

文学運動としてのロマン主義自体は啓蒙主義(enlightenment)への反応として1770年から始まって1848年までである。ロマン主義はその間に起きた革命である、アメリカ独立革命、フランス革命とギリシャ革命に影響を与えた。ロマン主義とは自己の主張と個人的な経験と共に理想主義的な意識であった。ロマン主義は社会に、これらの感覚は進歩的な大義を植えつけ、それが適わない際には、苦々しく陰鬱で絶望的な見通しとなった。ロマン主義のスタイルは激烈さであり、そのキーワードは「想像(imagination)」である。ロマン主義には3つの流れがある。イギリスでは最初の世代はワーズワース、コレリッジ、バーンズ、ブレイクなどであり、ゴシック小説家ホレイスなども含まれる。<sup>(1)</sup> ゴシック小説とロマン主義小説は、小説によっては両方のジャンルに属するということになる。なぜならば、暴君から逃げて個人の生活を目指したり、強い愛情ゆえに束縛して閉じ込める人物が存在したりするからである。

初期のロマン主義には崇高さ(sublime)という概念があり、それはケルトの吟遊詩人の歌詞の謎が解明されたことに由来する。マクファーソンが「オシアン」(Ossian)を解明したり、民謡がパーシーによって収集されたり、チャタトンによって中世の詩が作り出されたことによる。イギリスの外でもロマン主義は起こっていた。ゲーテの『若きウェテルの悩み』(1774)、シラーの戯曲『泥棒』(1773)などである。ロマン主義の雰囲気はルソーの『新エロイズ』(1761)やオリエンタルの神話やホーマーの話や17世紀の旅行作家などによって作られた。<sup>(2)</sup>

イギリス文学におけるロマン主義の2期めはパイロン、キーツ、シェリーという詩人達であり、彼らは激的な影響を吸収して、ギリシャとスイスとイタリアという広い地域へと旅行をした。そして彼らは成熟する前に亡くなった。彼らの書簡や日記などの人生そのものが詩という作品と同じくらい重要である。<sup>(3)</sup> 彼らこそが典型的なロマン主義の生き方だった。

後に、彼らに影響されて文章作家であるデ・クエンシー、ラム、そして歴史小説ではウォルターズ・

コットがいた。ロマン主義作家達は物事を新鮮な目で見た。彼らはバーチャルな景色を想像したのである、湖やアルプスの山々、イタリアの湾などである。彼らは野生の景色の原始的な力、人間と自然、有機的な形に直感を得た。彼らは劇的な幻想について書き、古典主義と理性の限界について書いた。彼らの主題は子供時代、報われない恋、外国へ行く主人公だった。ロマン主義作家の自由 (liberty) により、女性作家が影響を及ぼすようになる背景ともなった。ブロンテ姉妹もその中にある。ロマン主義は古典主義的な形式、保守的な道徳、権威的な政府、個人的な不誠実、中庸さに対する終わることの無い反抗を表現した。イギリスのロマン主義文学はナポレオン戦争後のフランスに影響を及ぼし、ユーゴー、ドラクロワの絵、ベルリオーズの音楽などはその例である。<sup>(4)</sup>

『嵐が丘』にはゴシックとロマン主義の両方の要素があるが、ゴシックとロマン主義は束縛と自由という両極端のテーマでありながら、両方の要素が作品の中に入りやすい。ヒースクリフはキャサリンやイザベラを悲惨な目に遭わせたが、同時にヒースクリフ自身がロマン主義の精神の持ち主だった。

#### 4 ロマン派のベートーベンとヒースクリフ

ロマン主義とは、魅惑的な感情や情熱を架空の世界で解放する生活を意味している。ロマン主義は古典主義と対照を成して、古典主義への不満、古典主義からの向上、逃げから作られた。ロマン主義によって自由な思考で自由な形式を許された作曲家たちは感情や内面のアイディアを情熱的に表現できた。ベートーベンも形の上では古典主義だが、ロマン主義的な魂は古典主義の作曲家達とは対を為す。ベートーベンの強烈な感情の訴えは『嵐が丘』の登場人物と概念の成り立ちに影響したに違いない。作者のエミリー・ブロンテ自身はハワースでピアノを弾いていたが、留学先のブリュッセルで音楽観が大きく変わる。『嵐が丘』の作者のエミリー・ブロンテはフランス語などの他にドイツ人の作曲家からピアノを習い、ベートーベンやベルリオーズなどのロマン派の作曲家の曲のコンサートを聴いた。ベートーベンの曲では、(レオノーレ序曲)、ベルリオーズの曲では「ロミオとジュリエット」、「幻想交響曲」、「イタリアのホルド」などを聴いた。これらは皆、元が文芸作品であり、レオノーレは三角関係の愛憎劇のオペラの序曲であり、ロマン派的な要素が盛り込まれている。<sup>(5)</sup> ベートーベンの音楽とエミリーの『嵐が丘』にある共通の精神性は嵐と唸りであり、嵐と静けさ両方がある。<sup>(6)</sup>

ヒースクリフはベートーベンがモデルとされている。ベートーベンもヒースクリフも生まれは不明である。ベートーベンも死んだ子供の代わりであり、ヒースクリフを引き取ったアーンショウ家も幼くして亡くなった子供の名前をつけた。両者とも王族の血をひいているのではと思われる。<sup>(7)</sup>

Who knows but your father was Emperor of China, and your mother an Indian queen,  
each of them able to buy up, with one week's income, Wuthering Heights and

Thrushcross Grange together? (Chapter 7)

ハンサムな顔立ちのヒースクリフはこのようにネリーから言われている。一方ベートーベンはプルシア王フレドリック 2 世 (Frederick William II) の子供であるともうわさされている。ベートーベンもヒースクリフも家の長と対立する。ヒースクリフはキャサリンの兄であるヒンドリーと対立する。そのために、ベートーベンもヒースクリフも彼らを困った社会の価値観を覆す。ベートーベンの伝記を書いたシンドラー (Shindler) によると、ベートーベンは「地位と富は関心がなく、それに関して尊敬の念も無かった」。<sup>(8)</sup> ヒースクリフも大人になる前は地位や富に関心が無かった、そして粗野で元気で束縛の無い自然体でいる。それは「高貴な生活のエチケット」をベートーベンの場合と同じように跳ねつけた」。ヒースクリフは拾われてアーンショウ家に来てから主人には可愛がられたが、長男のヒンドリーはヒースクリフを虐待し、主人が亡くなってヒンドリーが長になるとヒースクリフは召使いとして扱われる。ヒースクリフはそれにもめげず、屋敷のルールとは別世界の荒れ野へとキャサリンと出かけて行くのだった。

But it was their chief amusements to run way to the moors in the morning and remain there all day, and the after punishment grew a mere thing to laugh at. The curate might set as many chapters as he pleased for Catherine to get by heart, and Joseph might thrash Heathcliff till his arm ached; they forgot everything the minute they were together again: at least the minute they had contrived some naughty plan of revenge; and many a time I've cried to myself to watch them growing more reckless daily, and I not daring to speak a syllable, for fear of losing the small power I still retained over the unfriended creatures. (Chapter 6)

ヒースクリフとキャサリンは荒野へ行って遊ぶのが楽しく、2 人は罰せられても行くのだった。そして罰せられたことに対する復讐 (revenge) としてさらに荒野で遊ぶ計画を立てた。彼らは益々むこうみずになった。語り手のネリーは注意すれば自分の威厳が下がってしまうような気がして注意できないでいた。キャサリンとヒースクリフは、荒れ野へ行くことによって、家の中での価値観や地位を「跳ねつけて」いる。またキャサリンは、あまりにも野生に返っているのでネリーは二人のことを「人を寄せつけない動物」 (the unfriended creatures) と言及している。

## 5 語りの省略

『嵐が丘』は元々はロックウッドはいなかった。北部の農民と南部の読者の間に通じ合うものがないという理由で出版社から拒否されたと思ったエミリはロックウッドを登場させた。<sup>(9)</sup> 『嵐が丘』はロックウッドとネリーによる2重の語りが無い映画などの形にする方が、作者エミリが書こうとしていたものに近いのではないかとさえも思われる。

バージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882 - 1941)は『嵐が丘』はエミリ自身が自己を統一するためにこの小説を書いたと解釈している。<sup>(10)</sup> 実際にこの長編小説は主要な登場人物も何人もいて、3代にわたる物語であることに加えて、物語での重要な出来事が分かりにくく見落としてしまいやすい。『嵐が丘』はロックウッドという紳士が農家の一軒家を訪ね、この家の系譜を女中のネリーから聞くという外枠の話と、ネリーの語りによるこの家系の話という内枠の話から成り立っている。最初は『嵐が丘』は内枠の話だけだった。つまりこの家系で起きた出来事の物語だった。<sup>(11)</sup> この分かりづらさは小説の語りの方が「省略法」(elipse)と黙説法(paralipse)を用いているからだと説明することができる。物語の中の時間の流れの中である部分が飛び越えられる場合を「省略」という。<sup>(12)</sup> キャサリン1世は子供を産んで間もなく亡くなるが、小説は急にキャサリン2世が思春期になるところへと飛ぶ。

The twelve years, continued Mrs Dean, following that dismal period, were the happiest of my life: my greatest troubles in their passage rose from our lady' strifling illnesses, which she had to experience in common with all children, rich and poor.

(Chapter 18 冒頭)

Mrs Deanとは語り手の召使いネリーのことであり、話がキャサリン1世が子供を産んでから12年後、つまりキャサリン2世が12歳になるまでのことを要約している。that dismal period(その陰鬱な期間)とは、キャサリンが病気になり、子供を産み亡くなるまでのことである。キャサリン2世は、他の幼児がかかる病気には罹ったものの、順調に12歳まで成長した。

For the rest, after the six months, she grew like a larch and could walk and talk too, in her own way, before the heath blossomed a second time over Mrs. Linton's dust.

(Chapter 18)

キャサリン2世は生まれてから半年ほどで「唐松のように」育ち、キャサリン1世の母であるリントン夫人の死後2年が経過する頃には、つまりキャサリン2世が歳になる頃には歩いたり話したりでき

るようになった。2年という期間は“before the heath blossomed a second time over Mrs. Linton’s dust”（「リントン夫人の埋葬場所の上にヒースが花を咲かせた2度めまでには」）という表現されている。これらの箇所以降、12歳になったキャサリン2世の性格が述べられている。そしてキャサリン2世の13歳の時の出来事が描かれる次の段落の冒頭では「13歳になるまでは」という書き方がされている。

Till she reached the age of thirteen, she had not once been beyond the range of the park by herself. (Chapter 18)

家の敷地の高原からキャサリン2世は13歳になるまで出たことが無かった、つまり13歳になったある日、初めて1人で家の敷地の外に出る。そしてアーンショウ家のいとこヘレトンに出会う。一方でヒースクリフの妻であるイザベラはその昔、ヒースクリフと別居したが、その事件のことが説明される際に、後にイザベラが亡くなることが書かれている。

Fortunately its mother died before the time arrived; some thirteen years after the decease of Catherine, when Linton was twelve, or a little more. (17章)

イザベラは暴力的なヒースクリフと離れざるを得なくて、家を出てひっそりと暮らし、その間にヒースクリフとの赤ん坊を産む。妻に出て行かれたヒースクリフは召使いのネリーにイザベラの居場所を聞くが、ネリーは答えない。Lintonとはリントン・ヒースクリフと名付けられたその赤ん坊、すなわちヒースクリフ2世のことである。

A letter, edged with black, announced the day of my master’s return. Isabella was dead; and he wrote to bid me get mourning for his daughter, and arrange a room, and other accommodations, for his youthful nephew. Catherine ran wild with joy at the idea of welcoming her father back; and indulged most sanguine anticipations of the innumerable excellences of her ‘real’ cousin. (19章冒頭)

「黒い縁取りの手紙」(a letter, edged with black)が届き、キャサリン2世の父親が家を空けていたのが戻って来ることと、イザベラが亡くなったことが記されている。喪服(mourning)を用意するという他に、キャサリン2世のいとこであるヒースクリフ2世のための部屋を空けておくという用件が書かれている。キャサリン2世は父方のいとこであるヒースクリフ2世に会えることを喜ぶ。キャサリン2世もヒースクリフ2世も13歳である。ヒースクリフ2世はお屋敷に一晩泊まる

が、翌日、ヒースクリフ 1 世が住むアーンショウ家に帰って行く。キャサリンは残念がるのだった。すると、語りは 3 年後のことになる。

Time wore on at the Grange in its former pleasant way, till Miss Cathy reached sixteen.

( Chapter 21)

その日にキャサリン 2 世はヒースクリフ 2 世に再会し、3 年間に成長した二人はまたあらたに惹かれ合う。そして二人は手紙のやり取りをするようになるが、ネリーに見つかりいったん手紙を止める。ヒースクリフ 2 世は失望で弱ってしまい、それを心配したキャサリン 2 世はヒースクリフ 2 世に会いに行った。そして、ネリーが病気の時期に会い、仲を深めて行く。そしてキャサリン 2 世の父が弱り臨終になるが、キャサリンはもう既にヒースクリフ 2 世と結婚していたので、病気の夫を置いて実家に帰ることが許されなくなっていた。しかしキャサリンはやっと、臨終に立ち会うことができる。ここでまた分かりにくいのはキャサリンがヒースクリフ 2 世と結婚していたということである。

Linton lay on the settle, sole tenant, sucking a stick of sugar candy, and pursuing my movements with apathetic eyes. 'Where is Miss Catherine?' I demanded sternly, supposing I could frighten him into giving intelligence, by catching him thus, alone. He sucked on like an innocent. 'Is she gone?' I said. 'No,' he replied; she's upstairs; she's not to go; we won't let her.' 'You won't let her, little idiot!' I exclaimed. 'Direct me to her room immediately, or I'll make you sing out sharply.' 'Papa would make you sing out, if you attempted to get there,' he answered. 'He says I'm not to be soft with Catherine; she's my wife, and it's shameful that she should wish to leave me.' ( Chapter 28 )

キャサリンの父親が危篤なので、ネリーがキャサリンが滞在しているアーンショウ家に行くと、リントン（ヒースクリフ 2 世）がおり、飴をなめている。リントンは「彼女は私の妻だ」(she's my wife) という理由で、キャサリンを家から出そうとしない。キャサリンが結婚したことはこの一言だけでしか説明されていない。

## 6 拒まれる成熟

人生を超える愛として知られている「嵐が丘」だが、原作の小説はもっと複雑である。農家のアーンショウ家と貴族のリントン家 (Linton)、そして小作人の身分であるヒースクリフとの階級闘争、



ヒースクリフとヒンドリーとの争い、そして小説のページに多く見られるのが激しい怒りと、暴力、ののしり合いである。さらには、登場人物たちは不機嫌になると何も飲み食いしなくなる、つまり断食 (fast) をしてしまう。キャサリンもヒースクリフも直接の死因は断食であることが小説そのものを読むと分かる。

実際に、作者のエミリー・ブロンテ (Emily Bronte, 1818 - 1848) 自身も、最期は何も飲み食いしなくなって、菓までも拒んだために、風邪をこじらせた状態が酷くなって 30 歳で亡くなってしまふ。食べることを拒否することが自らの状況をコントロールすることができる数少ないことであった。この、エミリーの拒食症的な態度は成熟を拒否する姿勢とも言える。3 姉妹のうちの年上であるシャーロット (Charlotte, 1816 - 1855) はいくつも小説を出版したが、エミリーが出版したい小説はほとんど唯一『嵐が丘』だけである。イングランドの寒村ハワース (Hawarth) で生まれ育ち、中年に達しないうちに亡くなったエミリーが、恋愛の記録もないので、こんな恋愛小説を書けたこと自体奇跡であるという見解があるが、実際に小説は恋愛の場面よりも憎しみの場面が多い。けんかをしたり、怒ったりである。エミリーは、ベルギーへ留学したことで、フランス語やドイツ文学など、大陸的な文化を知った。エミリーはベートーベンなどのドイツの作曲家の曲に親しみ、また、ホフマンやゲーテなどのドイツ文学に共鳴した。それらはロマン主義の作品である。

作者のエミリー・ブロンテは 30 歳で風邪のために亡くなってしまったが、多くのロマン派作家も若くして死んだ。若くして世を去った作家が書く世界は、若い人々の世界であり、大人になっていない人の世界、成熟していない人達の世界である。ジェイムズ・バリ (James Barrie) は、夭逝した作家ではないが、その作品のピーター・パンは永遠の赤ん坊である。『嵐が丘』の登場人物達は永遠の思春期の人達である。ヒースクリフはキャサリンが 6 歳の時に嵐が丘の農家へと引き取られる。二人は仲が良いが、キャサリンが 15 歳の時に荒野を隔てて隣の家である貴族のリントン家の息子に求婚され、それと同時にヒースクリフは失踪する。それから 3 年後のキャサリンが 18 歳だった時に、キャサリンは既に結婚していたが、ヒースクリフは嵐が丘に戻って来て再び住み始める。そして翌年のキャサリンが 19 歳になる年にキャサリンの前に現れる。キャサリンは夫とヒースクリフとの間で分裂し、熱病にかかり、食べることも拒絶するようになる。一方でキャサリンの夫の妹のであるイザベラはヒースクリフを気に入り、彼と駆け落ちする。キャサリンは拒食と熱病により亡くなり、亡くなる直前に子供を産む。程なくしてキャサリンの兄も亡くなるので嵐が丘はヒースクリフが引き継ぐこととなる。イザベラは子供を身ごもったまま嵐が丘を出て行き、ヒースクリフとの間の子供を産む。その子供がヘレトンである。

キャサリンは 15 歳でリントン家の息子に求婚され、ヒースクリフはその時 16 歳であった。キャサリンが 15 歳でヒースクリフが失踪し、19 歳でヒースクリフに再会するが、19 歳のうちに亡くなる。

キャサリン 2 世の話は 13 歳からのことで、16 歳でヒースクリフ 2 世と交際し、翌年の 17 歳の時にヒースクリフ 2 世と結婚し、18 歳でヒースクリフ 2 世が病死し、19 歳でヘレトンと結婚する。キ

キャサリン2世とヒースクリフ2世は同じ歳、ヘレトンもキャサリン2世が生まれて間もなくして生まれているのでキャサリン2世と同じ歳である。ヘレトン自身も19歳での結婚である。物語はキャサリン2世の結婚で終わる。つまり、『嵐が丘』全体が10代の人達の小説である。親の世代も10代で終わり、子供の世代も死という形ではないが、物語自体が10代で終わっている。故に、永遠の思春期がテーマとなっている。第一世代で成功しなかった恋愛が第2世代で実現するというのがこの小説の魅力である。

『嵐が丘』はウィリアム・ブレイク (William Blake) の「無垢と経験」(“Innocence and Experience”) の無垢と経験という二つの反対の世界によって形作られていると言える。<sup>(13)</sup> キャサリン1世が死ぬまでのヒースクリフ1世とキャサリン1世の関係が無垢の世界、キャサリン2世とヒースクリフ2世が経験の世界である。ヒースクリフ1世は大人の権力の領域を嫌ったが、第一世代である「アーンショウ世代」では男性と女性が精神的な統合を果たそうとするには無垢のロマンスでは不十分であった。ヒースクリフとキャサリンは彼らの絆について話そうとするのだが、省略的になり、比喩的で遠回りになってしまい、ネリーの語りのようにはっきりと二人の関係性を言葉にできないのである。しかし作者のエミリー・ブロンテは、キャサリンとヒースクリフの言葉にできない表現を補っている。つまり作者は、他のロマン主義の詩人達の多くのように、夢で表すことのできる幻想的な現実をつなげた。<sup>(14)</sup>

ビクトリア時代には、どのように上昇してゆくかという小説が求められて出版されていった。姉のシャーロットの『ジェーン・エア』(*Jane Eyre*, 1847) は家庭教師の女性が屋敷の主人と結婚する話であり、その時代のニーズに合っていた。シャーロットの作品は他には『ヴィレット』(*Villette*, 1853)、『シャーリー』(*Shirley*, 1849) がある。『ヴィレット』はベルギーのブリュッセルをモデルとした街ヴィレットにある寄宿舎付きの女学校にイギリス人女性教師が赴任する話である。派手で内省しない女学校の生徒と教師達は懺悔すれば許されてしまうカトリックを信奉するベルギーの人達の態度である。それに対して主人公であるイギリス人教師はプロテスタントで罪を反省しながらつましい態度であり、イギリス人女性教師は自分のあり方を正しいとしている。さらには、その学校には主人公教師に対して意地悪がある。さらには修道女達の幽霊もいる。表面的には華やかで明るい学校が、実は暗く、問題解決にふたをしてしまうことがこの小説には描かれており、主人公の女性教師の価値観が正しいことが描かれている。この小説で訴えていることの一つはモラルである。ゆえに、正しいこととは何かの説かれていて、作品の目的がはっきりとしている。この小説は学校で起こる話であるゆえに、ゴシック小説でもある。『シャーリー』はナポレオン戦争後のラッドイト運動 (Luddite riots) の頃、イギリスの毛織物が輸入品に押されて売れなくなっていた時に新たな機械を導入することで従業員が削減されることをおそれて、工場の人達の反乱が起こった。工場長は若い資産家の女性に相談する。小説はシャーリーというその若い資産家の女性と友達になった女性の視点で書かれている。女性が結婚以外に社会で期待されないことについてなど、女性の資質と労働について二人の女性が話し合

う小説である。この小説には恋愛も描かれていて、最後には二人の女性は自らが望む人とそれぞれ結婚する。『ジェーン・エア』と同じく、生活のために仕事をする女性も結婚するという、結婚によって上昇する女性達の姿が描かれている。これらは成功するための手本とも言える小説であろう。一方で『嵐が丘』は誰かが上昇してゆく話ではない。貧しい身分のヒースクリフが奉公先の屋敷の主人となり、支配してゆくという点で、階級が上昇していった話としては読むことができる。

1847年の19世紀半ばに出版された『嵐が丘』はビクトリア朝(1819 - 1901)に書かれた小説である。しかし、『嵐が丘』の小説は1771年から1803年までのことである。

## 7 期待される自己否定

キャサリン1世はリントン家を初めて訪れた日から家の人達と交流し、啓蒙されるが、淑女の自己否定の教育により、自身を否定してエドガと結婚することを決めることとなる。男性の成長小説は自己の輝かしい発見だが、女性が社会に期待されるべく人材として身につける教育は自己否定であることをキャサリンのこの決定は証明している。<sup>(15)</sup>

‘Or dear!’ she cried at last. ‘I’m very unhappy.’ (Chapter 9)

エドガ・リントンのプロポーズを受けたキャサリンは陰鬱な気持ちである。キャサリンはエドガを好きな理由を次のように言う。

‘And he will be rich, and I shall like to be the greatest woman of the neighborhood, and I shall be proud of having such a husband.’ (Chapter 9)

彼女はその他の決定はできない、彼女はエドガと結婚しなければならない、なぜならエドガ以外には結婚相手はいないし、淑女は結婚しなければならないからである。<sup>(16)</sup> そして、どのくらいエドガが好きかをネリーに聞かれてキャサリンは次のように答える。

‘I love the ground under his feet, and the air over his head, and everything he touches, and every word he says’ (Chapter 9)

エドガのことを好きだということを正統化するこの説明は上品なロマンティックな報告の苦々しいパロディである。このことは彼女が身につけた教育がどんなに効果的かを示している。文学的なロマ

ン主義が彼女を教化したのである。それは若い女性にふさわしいと思われた。それは酔うよな「女性らしさ」であり、父親や恋人や夫のカリスマ的存在を強めた。<sup>(17)</sup> エドガとの結婚は親戚から賛成されるであろうどこか、つましい貧しげな暮らしから豊かで心地よい暮らしへと上昇することでもあった。それでもキャサリンは納得できない。

‘in whichever place the soul lives. In my soul and in my heart, I’m convinced I’m wrong.’

(Chapter 9)

表面上はうまくいっても、本当に自分がそうしたいとはやはり思えないキャサリンである。しかしそうかといって、ヒースクリフと結婚するわけにはゆかない。

‘I’ve no more business to marry Edgar Linton than I have to be in heaven; and if the wicked man there had not brought Heathcliff so low, I shouldn’t have thought of it. It would degrade me to marry Heathcliff now; so he shall never know how I love him: and that, not because he’s handsome, Nelly, but because he’s more myself than I am. Whatever our souls are made of, his and mine are the same; and Linton’s is as different as a moonbeam from lightening, or frost from fire. (Chapter 9)

彼女が「ヒースクリフと結婚することが彼女のランクを落とさせる」と説明するのは、彼女が身につけた教育の避けられない結果である。彼女が淑女の座に落ちつくことはヒースクリフ自身も女性の弱い力と同等に縮小されてしまうことによって成り立つ。キャサリンは、女性であるということが地位が低いならば、女性のようなことはさらに地位が低いということを正しく認識している。<sup>(18)</sup>

嵐が丘を訪れたロックウッドは第3章で“Catherine Earnshaw, Catherine Heathcliff, Catherine Linton”と3つの名前だけが何度も書かれたノートを見つける。それはおそらくエドガに求婚された頃のキャサリンが書き付けたものだ。キャサリンも他の女性も、自分の名前すら分からないし、自分が何者であるか知ることができない、そして、彼女には誰が運命の人なのかも知ることができないのである。<sup>(19)</sup>

## 8 墓というロマンス

ウォルター・スコットはスコッツ語を開拓したが、エミリ・ブロンテはイングランドのヨークシャーなまりを開拓した。<sup>(20)</sup> 『嵐が丘』ではジョセフを始めとする使用人が現地のなまりを話している。

フランスやドイツやイタリアの古い詩を読んでいたスコットはスコットランドの昔の詩を発掘して世に広めた。<sup>(21)</sup> このように、古い物語や昔からあったことを掘り起こすのもロマン主義の原点である。

また、『嵐が丘』はバイロンの「夢」(“Dream”)という詩とプロットが同じであり、「夢」という詩の枠組みに細かい事柄を足した作品が『嵐が丘』であるということも考えられる。「夢」は次のような内容の詩である。夢見る人(dreamer)は二人の若者を夢で見て、二人は兄と妹であり互いに愛し合っている。女性はもう一人の男性のことも好きで、兄は未知の場所(exotic land)へ行き、やがて戻って来る。女性はもはや、好きでもない人と結婚していて、男性も好きではない人と結婚する。女性は狂い、男性は「嫌悪と闘争」の生活となる。しかし男性はやがて「宇宙的な精神性」を理解する境地となる。<sup>(22)</sup> この話自体が『嵐が丘』の概要である。ヒースクリフは拾われて来た子供だが、同じ家で兄弟のようにキャサリンと一緒に育つので、キャサリンとヒースクリフは兄弟の関係である。同じ家の者同士なので、結婚することはできない。また、ヒースクリフは拾われて来たが、アーンショウ家の父親がなぜヒースクリフを拾って来たかは謎である。アーンショウ家の父親にはキャサリンとヒンドリーという子供の他に、母親違いのヒースクリフという子供がいたかもしれないと考えることができる。アーンショウ家の父親自身は隠し子がいたことは言わないが、ヒースクリフを連れて来て育ててやる決意をしたことは理由がなければ不自然である。キャサリンとヒースクリフが異母兄弟だとすると、『嵐が丘』は兄と妹の恋愛ということになる。

イギリスのロマン主義の詩人達はシェイクスピアの作品を元にして想像を拵げていった。ヒースクリフとキャサリンは「マクベス」のように「人間の領域や人間としての目的、欲望」から「連れだされた」のである。<sup>(23)</sup> ヒースクリフはキャサリンの夫エドガーが埋葬される際に、墓守に頼んで、キャサリンの棺の上の土をどけさせ、キャサリンの棺を開けた。

‘I thought, once, I would have stayed there: when I saw her face again - it was hers yet! - he had worked hard to stir me; but he said it would change if the air blew on it, and so I struck one side of the coffin loose, and covered it up: not Linton’s side, damn him! I wish he’d been soldered in lead. And I bribed the sexton to pull it away when I’m laid there, and slide mine out, too; I’ll have it made so: and then, by the time Linton gets to us he’ll not know which is which!’ ( Chapter 29 )

棺の中には18年前に亡くなったキャサリンの顔があった。しかし空気が入ると浸食するので、ヒースクリフは棺の片方だけを外して、土をかけた。リントンの側ではない方を外した。そして、ヒースクリフは、墓守に、ヒースクリフ自身が死んだら、キャサリンの隣に埋めてくれるように頼んだ。

ヒースクリフは幽霊の存在を信じている。キャサリンが埋葬された日に、夜に墓へ行き、キャサリンの墓を掘り返し、棺を外そうとするが、不可能でそのまま家に戻った。しかしその時にヒースクリ

フはキャサリンのため息を聞き、キャサリンの幽霊の存在によってヒースクリフは生きる希望を見いだした。

‘I appeared to feel the warm breath of it displacing the sleet-laden wind. I knew no living thing in flesh and blood was by; but, as certainly as you perceive the approach to some substantial body in the dark, thought it cannot be discerned, so certainly felt that Cathy was there: not under me, but on the earth. A sudden sense of relief flowed from my heart through every limb. I relinquished my labour of agony, and turned consoled at once: unspeakably consoled. Her presence was with me: it remained while I refilled the grave, and led me home.’ (Chapter 29)

ヒースクリフはキャサリンの幽霊を支えに、息子の結婚を見届け、病弱な息子が死ぬまで生き続けることができた。

ヒースクリフもまた、かつてキャサリンがそうだったように数日間何も食べなくなって衰弱して死ぬが、本人の希望通り、キャサリンとその夫の隣に葬られる。

We buried him, to the scandal of the whole neighborhood, as he wished.

(Chapter 34)

“to the scandal of the whole neighborhood”とあるように、近隣の人々にとってはヒースクリフがキャサリンのすぐ隣に眠ることはスキャンダルだった。ヒースクリフの意図は、キャサリンの棺桶の片方を外してあったので、その隣に自身が葬られることで、二人が隔たり無く一緒にいられるようにすることであり、その意図が実現されたのである。墓の中に横たわるというテーマは、ロミオとジュリエット (Romeo and Juliet) にある。「ロミオとジュリエット」では、家から認められた結婚ができないロミオとジュリエットが、ジュリエットが死んだように見せかける薬を飲むことによって墓に葬られ、眠りから目覚めるジュリエットをロミオが迎えに来て二人が逃亡するという計画を立てる。

Hareton, with a streaming face, dug green sods, and laid them over the brown mould himself: at present it is as smooth and verdant as its companion mounds - and I hope its tenant sleeps as soundly. But the country folk, if you ask them, would swear on the Bible that he *walks*: there are those who speak to having met him near the church, and on the moor, and even in this house. (Chapter 34)

ヒースクリフの埋葬に立ち会っているヘレトンは涙を流しながら土の草が覆っている部分を掘り、土の塊にそれをかける。その土の塊はキャサリンとその夫が眠る地面の上の土の塊と同じくらいみずみずしく、話し手のネリーは、ヒースクリフが安らかに眠ることを願う。しかしその後、ヒースクリフの幽霊が教会の近くや荒野や彼が住んでいた家の中に目撃された。

‘There’s Heathcliff and a woman, yonder, under t’ nab,’ he blubbered, ‘un’ I darnut pass ‘em.’

( Chapter 34 )

こう言ったのは羊を連れて歩いてきた少年である。少年はヒースクリフと女性が向こうに歩いているのが見えるので、彼らがいる場所を通ろうとしなかった。

## 9 駆け落ち

『嵐が丘』にはイザベラという登場人物が駆け落ちし、『オトランドの城』というゴシック小説が示唆されている。マンフレッドという城の主がいて、息子のコンラッドがイザベラという女性と結婚することになる。結婚式の当日、コンラッドは落ちてきた兜の下敷きになって亡くなる。マンフレッドは跡継ぎを残すために、妻と離婚し、イザベラと結婚しようとする。しかしイザベラはそうしたくはなく、逃げる。逃げる過程で、若い男性に助けられる。イザベラはその男性に好意を持つ。しかし男性には心を決めた女性がいた。その女性とはイザベラが結婚式を挙げていたコンラッドの妹マチルダだった。マンフレッドは逃げたイザベラを怒り、イザベラを捕まえて刀で突き刺す。しかし、イザベラだと思って殺したのは実の娘のマチルダだった。マンフレッドは城を手放す。そしてイザベラはその若い男性と結婚する。『嵐が丘』にはこの『オトランド城』に出て来ると同じ名前の人物が登場し、『オトランド城』でと同じように『嵐が丘』でも駆け落ちする。駆け落ちというテーマがあること自体がゴシック小説であると言える。

キャサリンの結婚後、ヒースクリフが訪ねて来て以来、ヒースクリフとキャサリンは親密になってゆく。村では二人が一緒にいるところを噂される。それを医者が見つかり、ネリーに伝える。「he」は医者、会話中の「I」も医者、「she」はキャサリン1世、会話中の「he」はヒースクリフである。()の中の「そして美しい夜でした！」はネリーが思ったことである。

‘No, she’s a sly one,’ he remarked, shaking his head. ‘She keeps her own counsel! But she’s a little fool. I have it from a good authority, that, last night ( and a pretty night it was!) she and Heathcliff were walking in the plantation at the back of you house, above

two hours; and he pressed her not to go in again, but just mount his horse and away with him! My informant said she could only put him off by pledging her word of honor to be prepared on their first meeting after that: when it was to be, he didn't hear; but you urge Mr Linton to look sharp!" (Chapter 12)

村の有力者 (authority) によると、前の晩、キャサリンとヒースクリフは家の裏の栽培所を歩いていて、2時間以上も一緒におり、ヒースクリフは彼女に家の中に入らないようにと言い、馬に乗って彼と一緒に逃げてくれと言った。情報提供者によると、キャサリンはその次に会った時に逃亡できるように準備すると誓うことによってやっとヒースクリフは引き下がった。次にいつ会うのかは言及されなかったが、医者ネリーに、リントン氏に注意深く見守るように説得するようにと言った。ヒースクリフはキャサリンと駆け落ちしようとしていた。その夜はネリーもリントン氏も寝られなかった。

Everyone was active, but Miss Isabella; and they began to remark how sound she slept: her brother, too, asked if she had risen, and seemed impatient for her presence, and hurt that she showed so little anxiety for her sister-in-law. I trembled lest he should send me to call her; but I was spared the pain of being the first proclaimant of her flight. One of the maids, a thoughtless girl, who had been on an early errand to Gimmerton, came panting upstairs, open-mouthed, and dashed into the chamber, crying; (Chapter 12)

その夜は家の人達はイザベル以外は起きていたのだった。イザベルだけが音も立てなかった。リントン氏はイザベルがその義姉にあたるキャサリンのことを心配しないのを心痛めていた。ネリーはイザベルを呼びに行かされないかとビクビクしていた。("I trembled lest he should send me to call her") しかし、ネリーはイザベルの逃亡 (flight) の第一発見者にならずに済んだ。ギマトンへの使いに行った召使いがイザベルが逃亡したことを伝えてきたからである。

'Oh, dear, dear! What mun we have next? Master, master, our young lady - 'Hold your noise!' cried I hastily, enraged at her clamorous manner. 'Speak lower, Mary - What is the mater?' said Mr Linton. 'What ails your young lady?' 'She's gone, she's gone! Yon' Heathcliff's run off wi' her!' gasped the girl. (Chapter 12)

「誰をよこしたらよいの?」(What mun we have next?) の「mun」は「man」のことである。「ヒースクリフの若旦那が彼女と一緒に逃げてしまったの」(Yon' Heathcliff's run off wi' her!) の「Yon'」は「Young」、「wi'」は「with」である。次に若い女中は、ギマトンで聞いた話をする。それによる



と、ヒースクリフとイザベルは真夜中過ぎにギマトンから 2 マイル先の鍛冶屋で馬のひずめを留めるために立ち寄った。二人を知る鍛冶屋の娘が彼らを目撃してそれが分かった。ヒースクリフはイザベルを乗せて急いで村を抜けて行った。(Chapter 12)

## 10 『嵐が丘』からロマン主義を定義する

このようにして『嵐が丘』を読んでゆくと、ロマン主義とは何かが見えてくる。『嵐が丘』は小説としては読者が説明を補って読まなければ理解しずらく、完成度が高いとは言えないのではないだろうか。『嵐が丘』はエミリ・ブロンテが初めて出版した小説であり、旅人のロックウッドが館の召使いのネリーから、館であった出来事を聞き出すという形であり、読者にとっては物語がじかに説明されていないのでぼやけている。さらに、物語の中で方言も使われていてそれが土地柄を表しているが内容を把握するには解説を要する。そして、結婚したことなどの重要な出来事が一言でしか書かれておらず、説明が足りない。時には夢と現実に起きたことの違いが、よく読まないと同じことのように思えてしまう。エミリ・ブロンテが出版の経験が豊富でもっと熟練した作家であったならば、省略や、語り手による編集無しのもっとそのまま読めば分かる作品であったかかもしれない。しかしロマン主義とは成熟していない若さであるとも言える。『嵐が丘』の語りの分かりにくさもロマン主義の特質の一つではないだろうか。多くのロマン主義の作家達がそうであったようにエミリも成熟するまえに若くして世を去った。若かったエミリが描く登場人物達も皆若く、キャサリン 1 世は 19 歳で、ヒースクリフ 1 世は 30 代で死んでしまうし、ヒースクリフ 2 世も 10 代で死んでしまう。キャサリン 2 世と、キャサリンの 2 度目の結婚相手であるヘレトンもまだ 10 代である。登場人物達は命は短い、その人生は凝縮されている。

### 注

- (1) Drabble, Margaret ed. *The Oxford Companion to English Literature* (Oxford University Press, 1985) pp842-843.
- (2) *ibid.*
- (3) *ibid.*
- (4) *ibid.*
- (5) Higuchi, Akiko. *The Bronte's World of Music* (Tokyo: Yushodo, 2005) pp273 - 274.

- (6) Wallace, K. Robert. *Emily Bronte and Beethoven : Romantic Equilibrium in Fiction and Music* ( The University of Georgia Press, 1986 ) p49.
- (7) *ibid.*, p187.
- (8) *ibid.*
- (9) 中岡洋『ブロンテ姉妹を学ぶ人のために』(世界思想社、1995年) p95。
- (10) Woolf, Virginia. “‘We the Whole Human Race’ and ‘You, the Eternal Powers...’ (1916)” , in Miriam Allott, ed. *Emily Bronte: Wuthering Heights : A Selection of Critical Essays: Casebook series* ( Macmillan, 1992 )p 108.
- (11) 中岡洋『ブロンテ姉妹を学ぶ人のために』(世界思想社、1995年) p90。
- (12) 広野由美子『「嵐が丘」の謎を解く』(創元社、2001年) p21。
- (13) Knoepfelmacher, C.U. *Emily Bronte : Wuthering Heights* (Cambridge University Press, 1989 ) p81.
- (14) *ibid.*, p 81.
- (15) Gilbert, M. Sandra. “Looking Oppositely: Catherine Earnshaw’s Fall” in Harold Bloom ed., *Modern Critical Interpretations : Emily Bronte’s Wuthering Heights* ( Chelsea House Publishers , 1972) p96.
- (16) *ibid.*, p97.
- (17) *ibid.*
- (18) *ibid.*
- (19) *ibid.*, p96.
- (20) Davies, Stevie. *Emily Bronte* ( Northcote House Publishers Ltd, 1997) p48.
- (21) Drabble, Margaret ed. *The Oxford Companion to English Literature* ( Oxford University Press, 1985 ) p878.
- (22) Reed, L. Walter, “Heathcliff: The Hero out of Time” in Harold Bloom ed., *Heathcliff* ( Chelsea House Publishers, 1993 ) p73.
- (23) Knoepfelmacher, C,U. *Emily Bronte: Wuthering Heights* (Cambridge University Press, 1989) p30.

参考文献

- Allott, Miriam. *The Brontes: The Critical Heritages*. London: Routledge and Kegan Paul, 1974.
- Barkar, Juliet, *The Brontes*. London: Weindenfeld and Nicolson, 1994.
- Bloom, Harold. *Major Literary Characters: Heathcliff*. New York: Chelsea House Publishers, 1993.
- . *Modern Critical Interpretations : Wuthering Heights*. New York: Chelsea House Publishers, 1972.
- Bronte, Emily. *Wuthering Heights*. (1847). London: Everyman, 1993.
- Benvenuto, Richard. *Emily Bronte*, Twayne Publishers, 1982.
- Chitham, Edward. *A Life of Emily Bronte*. Oxford: Blakwell, 1987.

- Craik, W.A. *The Bronte Novels*. London: Methuen and Co. Ltd, 1971.
- Davies, Stevie. *Emily Bronte*. Plymouth:Northcote House,1997.
- Frank, Katherine. *A Chainless Soul :A Life of Emily Bronte*. Boston: Houghton mufflin, 1990.
- Glen, Heather. *The Cambridge Companion to the Brontes*. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.
- Higuchi, Akiko. *The Bronte's World of Music: Music in the Seven Novels by the Three Bronte Sisters*. Tokyo: Yushodo, 2005.
- Kavanagh, H.James. *Emily Bronte*. Oxford: Basil Blackwell, 1985.
- Knoepfmacher, U.C. *Emily Bronte : Wuthering Heights*. Cambridge: Cambridge University Press, 1989.
- Miles, Peter. *Wuthering Heights*. Basingstoke: Macmillan Education, 1990.
- Morrison, N. Bryson. *Haworth Harvest: the Lives of the Brontes*. London: Dent, 1969.
- Pinion, F.B. *A Bronte Companion*. London: Macmillan, 1975.
- Prentis, Barbara. *The Bronte Sisters and George Eliot: A Unity of Difference*. Basingstoke: Macmilland Press, 1988.
- Robinson, Mary. *Emily Bronte*. (1883 ). Tokyo: Kenkyusha Books, 1968.
- Stevenson, W.H. *Profiles in Literature : Emily and Anne Bronte*. London: Routledge and Kegan Paul.1968.
- Thaden, Barbara. *Student Companion to Charlotte and Emily Bronte*. London: Greenwood Press, 2011.
- Vine, Steve. *Emily Bronte*. New York: Twayne Publishers, 1998.
- Wallace, K.Robert. *Emily Bronte and Beethoven : Romantic Equilibrium in Fiction and Music*. Athens: the University of Georgia Press, 1986.
- Willis, Cooper. *The Brontes*. London: Duckworth, 1933.
- Winnifrith, Tom. *The Brontes and Their Background : Romance and Reality*. London: Macmillan, 1973.
- Critical Essays on Emily Bronte*. New York: G.K.Hall, 1997.
- 坂本光『英国ゴシック小説の系譜』、慶応義塾大学出版界、2013年。
- ジル・ディックス・グナッシア『エミリー・ブロンテ 神への叛逆』、中岡洋訳、彩流社、2003年。
- 中岡洋『ブロンテ姉妹の留学時代』、開文社出版、1990年。
- 中岡洋『ブロンテ姉妹を学ぶ人のために』、世界思想社、2005年。
- 野中涼『ブロンテ姉妹 孤独と沈黙の世界』、冬樹社、1978年。
- パトリシャ・インガム『ブロンテ姉妹』 白井義昭訳、彩流社、2010年。
- 広野由美子『「嵐が丘」の謎を解く』、創元社、2001年。
- 藤木直子『ブロンテ姉妹の文学 - 詩と小説 - 内なる葛藤の記録』、2011年。